ITP-EUROPA 委員会 御中

2011 年 5 月
東京外国語大学　博士後期課程　小久保真理江

派遣報告書

研究分野：　イタリア文学・比較文学

研究テーマ：　チェーザレ・パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学・映画の影響

派遣先：　アメリカ合衆国

派遣期間：　2011 年 4 月 4 日ー19 日

派遣の目的：　学会参加と資料調査

学会名：　The 42nd Convention of the Northeast Modern Language Association

学会開催地：　ニュージャージー州ニューブランズウィック市（ハイアットホテル）

資料調査地：　ニューヨーク公共図書館（New York Public Library for the Performing Arts と Stephen A. Schwarzman Building）

派遣の目的

学会参加と資料調査のためアメリカに渡航した。ニュージャージー州で４日間に渡って開催された Northeast Modern Language Association（NeMLA）の年大会で研究発表を行い、その後ニューヨーク公共図書館で博士論文執筆に必要な文献・映像資料を閲覧・収集した。

NeMLA は人文学研究者の組織で、様々な言語（英・伊・仏・西・独・露など）の文学研究者が所属する。アメリカ北東部・カナダ東部の大学を中心とする地方組織だが、北米の他の地域やヨーロッパの国々の大学の研究者も数多く所属しており、年大会には様々な地域から研究者が集まる。また文学だけでなく、演劇や映画などの分野の研究者も所属する。

私は現在２０世紀前半のイタリアの作家、チェーザレ・パヴェーゼの作品におけるアメリカ文学・映画の影響について博士論文を執筆しており、研究対象が一つの国、一つの領域だけには限られない。そのため、多言語・多分野の研究者が集まるこのような学会に参加することを以前から希望していた。イタリア関係の研究者が

多いことで知られる NeMLA の年大会は、イタリア・アメリカ両国の言語・文化に通じる研究者と意見交換を行うのに理想的な場であると考え、応募を決意した。昨年の９月に発表要約原稿と参考文献表を送った後、主催者側から発表者としての参加が認められたため、短期派遣 EUROPA プログラムでの渡航を申請した。

派遣期間中の活動と成果

今年度の NeMLA 年大会はニュージャージー州ニューブランズウィック市にてラトガーズ大学の主催によって開かれた。４日間に渡る大規模な学会であるため会場には近隣のハイアットホテルが使用された。様々なテーマで３５０以上のセッションが企画され、各セッション（一時間半）の形式もワークショップやセミナー、パネル、ラウンドテーブルなど、多様である。イタリア研究の分野だけでも今年は５０以上のセッションが催された。毎日朝から夕方までホテル内の数多くの会議室で様々なセッションが同時進行で開催されるため、参加者はそれぞれの時間帯に最も興味のあるセッションを選んで、各部屋を移動することとなる。関心を惹かれるテーマが数多く、参加すべきセッションを選ぶのに苦労したが、 イタリア文学・アメリカ文学・比較文学のなかから、博士論文の執筆や将来の研究・教育活動に直接役立ちそうなテーマのものを選んだ。

私が研究発表を行ったのは「Literature and the Arts: An Exemplar of Multicultural Understanding」というタイトルのパネルである。文学とその他の芸術との相互影響関係をテーマとしたこのパネルでは、私も含めて四人の研究者が発表を行った。私は「Between Literature & Cinema, Between Italy & the United States: Representations of Class in Pavese’s Work」とのタイトルで、パヴェーゼの詩とアメリカ映画との関係について労働者階級の表象に焦点を当てて論じた。発表後の質疑応答ではラトガーズ大学のアンドレア・バルディ先生から発表内容に関する質問と助言をいただいた。大規模な学会ではあるが、多くのセッションが同時進行で行われるため、ひとつひとつのセッションは比較的少人数で、率直な意見交換のしやすい雰囲気であったのがよかった。

この学会への参加は、現在の論文執筆、そして将来の教育・研究活動にも役立つ非常に貴重な経験であった。まず、他分野の研究者にも内容が簡潔に伝わるように心がけながら発表原稿を準備することによって、思考を整理し論文の方向性を見直すことができた。そして、自らの発表についての質問や、他の研究者の発表からは執筆中の論文に活かすことが可能なアイディアを得ることができた。イタリア語教

育やイタリア移民文学についてのセッションで学んだことは、現在の研究には直結しないが、博士課程終了後の教育・研究活動に活かす予定である。

また、学会開催期間中に幅広い分野の研究者と交流することができたのも貴重な経験であった。ホテルの軽食スペースやロビーは学会の参加者で賑わい多言語が飛び交っており、分野の異なる初対面の研究者とも気軽に話のしやすい雰囲気であった。英語圏の大学に所属するイタリア人参加者が多く、イタリア語で話す機会も頻繁にあった。英語圏の大学でイタリア文学を研究する大学院生と各地の研究事情について意見・情報交換をする機会も得られた。

学会終了後は、ニューヨーク公共図書館にて資料調査を行った。私はイタリア文学とアメリカ文学・映画との関係を研究しているため、イタリア語文献だけでなく多くの英語文献にも目を通す必要がある。ニューヨークには蔵書・設備の充実した大学図書館や公共図書館が複数あるが、今回は二つの公共研究図書館（New York Public Library for the Performing Arts と Stephen A. Schwarzman Building ）に絞って資料調査を行った。リンカーンセンターに位置し舞台芸術や映画の貴重な資料を数多く備える New York Public Library for the Performing Arts では、映画に関する資料・文献を中心的に閲覧した。ニューヨーク公共図書館の本館である Stephen A. Schwarzman Building では、２０ー３０年代のアメリカ文学やモダニズム芸術に関する文献を中心的に閲覧し、重要な箇所は複写した。また滞在中には古書店にも赴き、論文執筆に必要な複数の書籍を安価で購入することができた。今後は滞在中に収集した資料を読み込む作業を進めつつ、学会参加や資料調査によって得た情報や考えを現在執筆中の博士論文のなかに取り入れていく。

おわりに

日本とイタリア以外の国で研究発表を行うのも、 NeMLA のような大規模な研究集会に参加するのも、私にとって今回が初めてであった。それゆえ学会参加に関して若干の緊張はあったが、実際には自身の研究発表も含め全てが順調に進み、現在の博士論文執筆作業だけでなく、将来の研究・教育活動にも役立つ貴重な経験を得ることができた。また、今後イタリア文学の研究を続けて行くにあたって、日本やイタリアにおける研究はもちろん、その他の国におけるイタリア研究や関連する他分野での最新の研究にも幅広く目を配り、海外の様々な場で研究成果を発表していきたいとの思いが強まった。今回、短期派遣 EUROPA プログラムでアメリカへ派遣していただいたことにより、重要な一歩を踏み出せたことに非常に感謝している。

多様な地域・分野の研究者が集う場で ITP-EUROPA 派遣期間中の研究成果を発表する機会を与えて下さったことについて、心からのお礼を申し上げたい。